

早良組 蠟燭講 140周年



平成30年5月13日(日)、教善寺様におきまして早良組蠟燭講140周年の記念法要を開催致しました。この度の法要にあたり、本願寺執行の中尾史峰様にご臨席を賜り、ご祝辞を、本願寺派司教の内藤昭文和上にはご法話をお聞かせいただきました。

140年という長い歴史の中で



お念仏の灯火が今なお私の中で輝いていることを喜ぶとともに、150周年に向けて益々教えが広がるよう、つとめてまいります。

多くの方にご参拝をいただきありがとうございました。また女声合唱団しらべの皆様、教善寺門信徒の皆様にはご協力いただき心よりお礼申し上げます。



平成29年度スタンプリー表彰式

6月11日(月)重留真正寺様にて早良組スタンプリーの表彰式を執り行いました。表彰者は左記の通りです。

30ヶ寺以上参拝の方には表彰状と記念品を、また、20ヶ寺以上参拝の方と10ヶ寺以上参拝の方にはそれぞれ記念品を組長様より贈呈していただきました。また、真教寺ご住職のご法話を聞かせていただいた後に、お茶をいただきながら、スタンプリーを終えて感じたことをそれぞれお話しくださいました。

*「ほかのお寺に、気軽にお参りできてうれしかったです。」「10ヶ寺を目標にお参りを始めましたが、気付くと20ヶ寺以上参拝させていただきました。」「などのうれしい感想をいただきました。また30ヶ寺以上参拝された方より、「1日で2ヶ寺参拝することがあった」と苦勞をお聞きしました。スタンプリーにご参加いただき、



お聴聞のご縁にたくさん遇っていただきましたことにお礼申し上げます。なお、本年度も早良組スタンプリーを開催いたしますので、皆様のご参加とご協力をよろしくお願いたします。

- 30ヶ寺以上の参拝者
 - 嶋田 厚枝様 (西光寺)
 - 松崎 光男様 (万徳寺)
 - 松崎 純子様 (万徳寺)
 - 松尾 照子様 (西教寺)
- 20ヶ寺以上の参拝者
 - 瀬崎 安代様 (真教寺)
 - 馬場 勇二様 (順光寺)
 - 松永 清光様 (万正寺)
 - 斎藤 涉様 (明性寺)
 - 中村 忍様 (明性寺)
 - 三苫 清子様 (真教寺)
- 10ヶ寺以上の参拝者
 - 永浦 正秀様 (明法寺)
 - 高木 義克様 (万正寺)
 - 正崎 朋子様 (西教寺)
 - 行武ひとみ様 (西教寺)
 - 水崎カツ子様 (西教寺)



はじめに

このたびの早良組だよりは、各寺院の報恩講法要で奉懸されており「御絵伝」を特集いたします。

本願寺第三代寛如上人(親鸞聖人のひ孫)は親鸞聖人のご遺徳を讃仰するために、そのご生涯の行蹟を文章と絵で交互に描いた絵巻物「本願寺聖人親鸞伝絵」を作られました。

後に多くのご門徒の方々にご覧いただけるようにと、文章と絵は別々に分けられ、それぞれ「御伝鈔」(文章の部分)「御絵伝」(絵の部分)と呼ばれ、広く親しまれるようになりました。

ご本山では御正忌報恩講の折に「御絵伝」(八幅)を御影堂

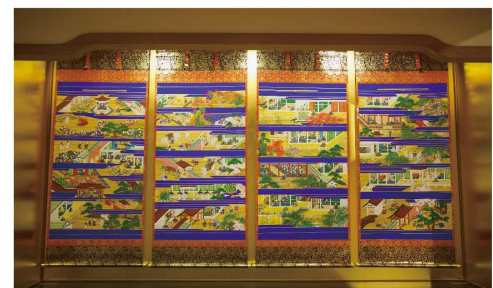
の左右両余間にお掛けし、1月13日に「御伝鈔」の拝読が行われています。また一般のお寺では四幅や二幅で描かれているものをお掛けするのが多いようです。

ここでは四幅の「御絵伝」の一つ一つの場面をうかがいながら、親鸞聖人のご苦勞を偲ばせていただき、ご生涯をかけて私たちに他力本願・往生浄土の道をお示しくくださったことを味わっていきたくと思います。



早良組 だより

御絵伝 絵で味わう 親鸞聖人のご生涯



第 4 幅



- 第5図 びようどうそうりゆう 廟堂創立 (下巻第7段)
- 第4図 そうそうだび 葬送荼毘 (下巻第6段)
- 第3図 らくようせんげ 洛陽遷化 (下巻第6段)
- 第2図 くまのれいこく 熊野靈告 (下巻第5段)
- 第1図 はこねれいこく 箱根靈告 (下巻第4段)

第 3 幅



- 第6図 べんねんさいど 弁円濟度 (下巻第3段)
- 第5図 いなだこうぼう 稲田興法 (下巻第2段)
- 第4図 しんらんしょうにん るざい 親鸞聖人ご流罪 (下巻第1段)
- 第3図 ほうねんしょうにん るざい 法然聖人ご流罪 (下巻第1段)
- 第2図 くぎょう せんぎ 公卿の僉議 (下巻第1段)
- 第1図 ねんぶつきんし 念仏禁止 (下巻第1段)

第 2 幅



- 第4図 にゆうさいかんざつ 入西鑑察 (上巻第8段)
- 第3図 しんじんじょうろん 信心諍論 (上巻第7段)
- 第2図 しんぎょうりょうざ 信行兩座 (上巻第6段)
- 第1図 せんじやくふぞく 選択付属 (上巻第5段)

第 1 幅



- 第5図 れんいむそう 蓮位夢想 (上巻第4段)
- 第4図 ろっかくむそう 六角夢想 (上巻第3段)
- 第3図 きつすいにゆうしつ 吉水入室 (上巻第2段)
- 第2図 しゅっけとくど 出家得度 (上巻第1段)
- 第1図 しょうれんいんもんぜん 青蓮院門前 (上巻第1段)

第5図 蓮位夢想

ここには年代順とは異なり、親鸞聖人の晩年84歳の時、弟子の蓮位房が見た夢のことが描かれています。

その夢とは、聖徳太子が親鸞聖人に対して「あなたはこの世界の人々に教えを伝え、最高のさとりを得させようと現れてくださったお方です」と禮拜されていたというものです。

第4図 六角夢想

前段で法然聖人のもとへ赴かれる機縁となつた、六角堂参籠が描かれています。

百日間の参籠の95日目の明け方、夢の中で救世観音のお告げをうけられます。この出来事により、親鸞聖人は吉水に赴かれ、お念仏の教えに帰依されます。

第3図 吉水入室

聖人29歳の時、20年間におよび比叡山での自力修行に行き詰まられ、東山吉水の法然聖人を訪ねられた場面です。

他力のお救いを説く法然聖人に感激され、生涯にわたり師と仰いでいかれました。後に親鸞聖人はこの時のことを、「建仁辛酉の曆、雑行を棄てて本願に歸す」と述懐されています。左側は法然聖人と対面されている親鸞聖人が描かれています。

第2図 出家得度

左側は青蓮院の各殿で、聖人が慈鎮和尚と対面されている場面。夕刻だったため「得度の式は明日に」と言われる和尚に、聖人は「明日あつての吹かぬものはと応えられ、その日のうちに式が行われました。

受式の様子が右側、聖人は3人の僧侶に囲まれ、両脇の僧が灯火をかざしていることから場面が夜であることがわかります。

第1図 青蓮院門前

第1図は9歳の親鸞聖人が出家の為、伯父の範綱卿に伴われて青蓮院を訪ねられた時の様子です。

聖人は右上に描かれている牛車に乗って来られたのですが、既に院内に入っておられまので、この図には登場されません。門の内外に描かれている人々は、車番や傘持・杓持、お供の従者などです。



第4図 入西鑑察

ここでまた親鸞聖人の晩年の場面です。

聖人70歳の年、お弟子の入西房にお姿を写すことを許されました。入西房はさつそく画家の定禅法橋を呼びました。定禅は聖人のお顔を見て「昨夜、善光寺の尊い僧侶の夢を見ました。そのお方は生身の阿弥陀さまに違いないと、うやうやしく礼拝しました。そのお方にそっくりです。」と、驚いて言いました。そして喜びの涙を流し、お姿を描きました。

第3図 信心諍論

親鸞聖人が「法然聖人の信心と私の信心とはまったくかわることなく、ただ一つです」と言われ、他のお弟子方と論争になる場面です。

お弟子方が「法然聖人の信心と同じであるとはとてもないことだ」と反発し、言い争いになりました。そこへ法然聖人がおいでになり「自力の信ならばおのの違うでしょうが、他力の信心ですから同じです。異なつた信心の方は、私の参る浄土へは生まれることはできないでしょう」と仰いました。

第2図 信行両座

親鸞聖人が法然聖人の許しを得て、門弟の方々のお念仏の味わいを尋ねられた時の場面です。

親鸞聖人は信心によつて往生が定まる信不退と、念仏によつて往生が定まる行不退の二座に分け、門弟はいずれに賛同するかを求められました。門弟がどちらにつくか決めかねているなかで、親鸞聖人は信不退に名をのせられました。しばらくして法然聖人が信不退の座につかれると、一同は面目ない顔色を隠しきれない様子でした。

第1図 選択付属

法然聖人のお弟子になられて4年目33歳の時、『選択本願念仏集』（以下『選択集』）の書写を許された時の様子です。『選択集』はお念仏の教えの要が全ておさめられている法然聖人の主著であり、これまでわずか数人の門弟にしかがえられていませんでした。

親鸞聖人はあまりご自身の事績について述べられてはいませんが、この『選択集』の付属（伝授）と御影の図画については特に『教行信証』の後序に「悲喜の涙をおさえて」と感動とともに記録されています。



右が入西房の願いを聞かれる親鸞聖人。左が親鸞聖人のお姿を描く定禅。



右は法然聖人にお尋ねしてる場面。左は信と行と分かれて座っている場面。



右は『選択集』伝授の場面。左はご真影に自筆の印を書かれている場面。

第6図 弁田済度

関東でお念仏の教えが弘まるにつれ、修験道の教えを離れるものが増えってきました。快く思わぬ山伏の弁田は、板敷山で待ち伏せして聖人に危害を加えようとしたが、思い通りになりません。そこで稲田の草庵に乗り込みました。しかし聖人の尊いお姿に触れた弁田は、修験道を捨てて熱心な念仏者となったのです。

第5図 稲田興法

ご流罪となられてから約5年、建暦元(1211)年赦免がくだされ、家族とともに越後国府から関東に移られる場面です。

第4図 親鸞聖人ご流罪

親鸞聖人が越後(新潟県)に向かわれる場面です。親鸞聖人は越後の国府にご流罪と決まり、法然聖人と同じく僧としての名を奪われ、藤井善信の名を与えられました。罪に問われ僧籍を奪われたとはいえ、単なる俗人ではありません。これ以降、愚禿(おろこ)と名乗られました。

第3図 法然聖人ご流罪

法然聖人が土佐の国(高知県)に旅立られる図です。法然聖人は土佐国幡多にご流罪と定まり、還俗させられ名前を藤井元彦と名乗られました。親鸞聖人と法然聖人、この時を最後に、二人がお会いすることはありませんでした。なお法然聖人は75歳とご高齡であり、実際は讃岐(香川県)に留まりました。

第2図 公卿の僉議

念仏停止が決まり、公卿らが法然聖人をはじめとする念仏門の処罰を相談しているところです。その結果4人が死罪、法然聖人・親鸞聖人をはじめ8人の流罪が決定しました。後にこのときの様子を『教行信証』にて憤りの思いを述べられています。

第1図 念仏禁止

念仏が禁止になり、市中の取り締まりが行われる様子が描いたものです。法然聖人の説くお念仏の教えが盛んになるにつれ、比叡山延暦寺や奈良興福寺の僧侶が朝廷にお念仏を禁止するよう圧力をかけてきました。朝廷の裁可により、承元元(1207)年にお念仏は禁止されました。



右から順に、板敷山にて待ち伏せしている場面、草庵に向かう場面、聖人と対面する場面、武器を捨て改心する場面です。



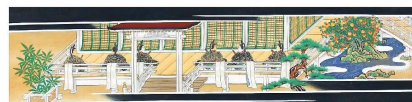
右は関東へ移住される道中。左は草庵にてご説法されている場面。



親鸞聖人をのせた輿が発出している場面。



法性寺の小御堂を出られる法然聖人。



御所清凉殿では、公卿による評定が行われ、御簾の奥には天皇が座しておられます。



第5図 廟堂創立

後に本願寺の起りとなるお堂が描かれています。親鸞聖人のご往生の10年後に、大谷の墳墓を改めて吉水の北側にお堂を建て、ありし日の聖人のお姿を安置しました。この頃よりお念仏の教えはいよいよ輝きを増し、聖人の志を受け継ぐ人は各地に広がります。この教えに出会う人々は数え切れないほどになり、多くの方が参拝されるようになりました。

第4図 葬送茶毘

火葬される場面が描かれています。親鸞聖人のご遺体は、東山の西の麓、鳥辺野の南の延仁寺にて茶毘に付され、ご遺骨は大谷の地に納骨されました。ご臨終に立ち会えた門弟、聖人とご縁を結ぶことができた人々をはじめ、生前の聖人を偲び、また聖人すてに亡き今を悲しんで、涙に暮れました。

第3図 洛陽遷化

3つの場面が描かれています。一つ目は、弘長2(1263)年11月下旬に入り、親鸞聖人は体調を崩されましたが、お念仏の御法義に出遇えた喜びを門弟たちに語られる場面(右)。二つ目は、11月28日(現在の1月16日)のお昼ごろ、念仏の息絶え、90歳にてお浄土にご往生される場面(右)。三つ目は、親鸞聖人の棺を門弟たちが見送る場面(左側)。

第2図 熊野靈告

親鸞聖人が昇洛の後、念仏者である平太郎という者が訪ねてきて、やむをえず熊野権現に参詣したくは、いけなくなつたことを相談すると、親鸞聖人は「お念仏を申す者は諸神にも崇敬され、護られるので、念仏者として参詣すればよいのです。」とお答えになりました。御絵伝には、平太郎が熊野権現で見た夢の様子が描かれています。

第1図 箱根靈告

親鸞聖人は、関東から京都へ帰られることになりました。その途中、箱根にさしかかつたところ、正装をした老人が現れたという場面です。この老人は、箱根権現の宮司で、「私が尊敬する方が今ここを通りかかられるので、特に手厚くお迎えするように」とのお告げを受けて、親鸞聖人の二行をもてなしました。



右下は親鸞聖人の棺をのせた輿。左は茶毘の炎。



下は平太郎が寝ている場面。上は熊野権現が親鸞聖人を崇敬している場面。



中央は親鸞聖人の一行を迎える宮司。左は第2図に出てくる、平太郎が親鸞聖人を訪ねる場面。